

G・ガルセス・コントレーラス著

『ラテン・アメリカの重大 問題——独裁者、少数者の支配、 帝国主義、民族自決』

Guillermo Garcés Contreras, *Los Grandes Problemas de América Latina*, Centro Editorial Latinoamericano, México, 1965, 142 p.

著者ガルセス・コントレーラスは政治史の専攻で、メキシコ国立自治大学その他で「国際政治」、「地政学」、「ラテン・アメリカの社会的経済的諸問題」等を講じている。またアジアとラテン・アメリカの低開発諸国をほとんどまわってこれらの諸国の現実をつぶさに観察してきた。本書は、1964年にメキシコ国立自治大学の政治社会学部と同経済学部で3回にわたって行なわれた講演の内容がもとになっている。ラテン・アメリカの直面する重大問題として第1に軍人独裁者の政権、第2にそれをはぐむ温床であるところの封建的経済構造、第3に帝国主義の支配を取り上げ、それらの束縛を脱するために革命が必要であること、ラテン・アメリカの人民は団結してその道を歩まねばならないことを訴えている。本書の構成は第1章「独裁者」、第2章「少数者の支配」、第3章「帝国主義」、第4章「民族自決」となっている。

I

第1章「独裁者」ではまずへき頭ラテン・アメリカの軍部クーデターと独裁政権について詳細な数字をあげての記述がある。それによると、1943年から1963年の20年間にラテン・アメリカ20カ国のうちの17カ国で68の軍部クーデターによる政府転覆が行なわれた。クーデターのなかったのはメキシコ、チリ、ウルグアイのわずか3カ国のみである。そしてこれら17カ国中11カ国は事実上独裁政権下にあったといえる。これを独立から現在までの約150年間についてみると実に535のクーデターがあり、この間注目に値するものだけでも217の独裁政権を枚挙することができる。つぎにこれら独裁者のうちで歴史上著名なものいく例かについての記述がある。1908～35年にわたってベネズエラを支配したゴメス(Juan Vincente Gómez)の独裁政権と外国企業との結びつきがベネズエラの経済をいかに畸型化し、この国の農業を破壊したか。

1876～1910年まで続いたメキシコのディアス(Porfirio Díaz)政権も石油、鉱山、鉄道等を通じていかに自国の富を外国企業に売り渡したか等である。ラテン・アメリカにかくも独裁者の輩出する原因はどこに求められるのか。著者はそれを大土地所有制を基礎とする封建的経済構造に求めている。そしてラテン・アメリカで最初の「ブルジョア民主主義革命」を行なったメキシコを唯一の例外として、他の諸国では封建秩序の破壊が行なわれていない。したがって軍人独裁を絶滅するためには封建的経済構造を破壊することが必須条件となる。封建的経済構造を破壊するにはいかなる道があるか。それはメキシコが1910年以来とった道である。すなわち農地改革を行なう以外にはない。このように封建的経済構造が独裁者を生むだけでなく、外国の援助がそれを助けている。第2次大戦後ラテン・アメリカの2カ国(メキシコとキューバ)を除いたすべての国がアメリカと相互軍事条約を結んでおり、毎年アメリカから多額の武器を買わされているが、これは独裁者にとって自国の人民の蜂起を抑えるのに役だつのであり、アメリカにとって独裁制はこれら諸国の共産化を防ぐ保証と考えられているのである。

そこでラテン・アメリカの独裁者をはぐむ封建的経済構造とその基礎をなす大土地所有制(ラティフンディオ)について、第2章「少数者の支配」で歴史的に説明している。

ラテン・アメリカの封建秩序は征服者スペインが自国の経済制度を新大陸に移植したときに始まり、その後450年間基本的に変わらないまま現在にいたっている。スペインからの政治的独立は社会的見地からみてなんらの前進を意味しなかった。独立後同じ土地所有階級であるところの教会と世俗地主との対立抗争があり、これは保守派と自由派の争いとして知られるが、後者が勝利をおさめたメキシコでは世俗地主が教会の土地を没収した。コロンビアでは19世紀以来、保守党と自由党の対立が続いたが、両者とも封建的支配階級の代表であることに変わりなく、この両者が結託して民衆の指導者ガイタン(Jorge Eliécer Gaitán)を倒した。アルゼンチンのペロン(Juan Perón)は封建的支配階級に対抗したが、農地改革を行なう勇気をもたなかったため結局封建勢力の反革命によって倒された。これには米英両帝国主義の後だてがあった。「進歩のための同盟」は、ラテン・アメリカ諸国が農地改革を含む社会改革を行なうことをアメリカの援助の前提としている点で、アメリカの対ラテン・アメリカ政策としてはいままでにない前向きのものである。

ることは疑う余地がない。しかしアメリカがこれらの諸国で社会改革を行なう担い手として期待しているものはほかならぬ封建的支配階級である。ところが土地所有階級が上からの手で改革を行なうわけがなく、革命と農地改革によって封建的経済秩序を破壊することが必要であると著者は強調する。

第3章「帝国主義」では、ラテン・アメリカに対する外国の政治的、経済的支配の歴史を振り返り、現在のラテン・アメリカがいかにアメリカの経済的支配下におかれているかを、いくつかの数値をあげて述べている。ラテン・アメリカに対する外国の政治的、経済的支配は450年間たえたことがなかった。300年にわたる植民地支配を脱するや独立戦争を助けたイギリスがスペインに代わって進出したが、イギリスの影響が強かった19世紀がラテン・アメリカにとって最も外国への従属性が少なかった時期といえる。1898年の米西戦争を契機としてアメリカがラテン・アメリカに進出して来るが、そこで英米両資本の激しい抗争があり、しだいに後者が前者にとって代わるのである。石油あるいは鉱山を有する国はほとんどこの争いに巻き込まれたが、その中でも最も深刻な例がボリビア、パラグアイ両国の間で戦われたチャコ戦争で、その背後には Standard Oil, Royal Dutch 両巨大資本の利権がからんでいる。アメリカのラテン・アメリカに対する進出は、特に中米に対しては軍事干渉によってその地歩を築いたところに特徴がある。それに続いて資本進出、経済的支配が完成され、ラテン・アメリカはアメリカ独占資本によって原料産出国、半植民地としての地位に置かれたのである。

20世紀にはいつてからの62年間にアメリカがラテン・アメリカから得た富はさまざまな形態のものを合わせて3090億ドルに達する。これはスペインが300年以上の植民地支配で得た富57億ドルと対比される。「援助」の名を借りた投資はラテン・アメリカをますます植民地経済の状態に追いやるのであって、アメリカがわれわれに与えることのできる唯一の援助は、われわれからの搾取をやめ、われわれを自由に生きさせることであると著者はいう。

以上でラテン・アメリカの進歩を阻んでいるものが第1に封建的経済構造、第2に帝国主義であることを明らかにし、第4章「民族自決」でこれらを打破する必要性を力説する。封建的経済構造を打破するためにはその基礎となっているラティフンディオを破壊すること、すなわち農地改革以外に道はない。それに加えて軍人独裁者

を根絶することが急務である。現在までに農地改革を実行した国はメキシコとキューバ以外にない。農地改革は有効な農業改革を伴うものでなければならない。そしてひとたび農地改革が軌道に乗るや工業化が行なわれなければならない。工業化がすべての社会、経済、政治構造を根底から変革するものだからである。工業化が発展への唯一の道であり、大衆の生活水準を引き上げる唯一の可能性でもある。低開発国における工業化は国家の干渉を抜きにしては考えられない。国家が国の経済の中枢を、とくにエネルギー源を手中におさえることが重要な鍵である。ここでもメキシコが外国独占資本の支配下にあった石油を国有化した最初の国としてあげられている。メキシコはそれに次いで電力の国有化にも成功した。今世紀のラテン・アメリカは1910年以後のメキシコの反封建革命と、第2次大戦を契機としていくつかの国で始まった産業革命を経験している。産業革命の結果できた新しい経済制度と新しい階級が古い封建秩序との間に矛盾をもたらし、また帝国主義、外国への経済的従属性と対抗関係にはいる。ラテン・アメリカはいまやこの矛盾・変革の時代にある。第2次大戦を契機に産業革命の段階にはいった諸国——ブラジル、チリ、アルゼンチン、コロンビア、ペルー、ベネズエラ——は近い将来必ずや政治的、社会的変革を経験するであろう。著者はパチスタ独裁下のキューバがいかに経済的植民地化の程度がひどく、カストロの革命はその当然の帰結として起こるべくして起こったものであること、アメリカ帝国主義はそれをたたくことによって社会主義路線を歩ませるにいったのであり、アメリカ帝国主義こそキューバ革命の産みの親であると指摘する。そして当時のキューバよりもひどい隷属状態にあるベネズエラでも当然起こるべきものは起こるであろうという。ベネズエラの石油の歴史は同国の経済の畸型化の歴史であり、外国の支配への屈服の歴史である。

最後に本書は、「ラテン・アメリカはともに生まれともに苦しんできている。圧制の勢力はおなじであった。封建勢力と帝国主義。解放の勢力もおなじでなければならない。われわれの理想は独立運動の指導者シモン・ボリバルの理想でなければならない。それは今日ほど必要とされるときはない。……ラテン・アメリカの統一こそが道なのである」(pp. 141~142)として終わっている。

II

本書は表現、論旨ともきわめて明快である。本書の基

調にあるものの見方は、ラテン・アメリカの勢力関係として一方に土地所有に基礎をおく少数の封建支配階級およびそれと結びつく帝国主義からなる反動勢力、他方に農民および産業革命の結果出現した労働者階級からなる進歩勢力を想定し、この両者の対抗関係そして後者の勝利に歴史の進歩の鍵があるというものである。

そこで問題となる点をあげるとまず第1に、民族ブルジョアジーの評価、位置づけに関してである。著者はメキシコ革命をブルジョア民主主義革命と規定し(p. 24, p. 33)、ラテン・アメリカの歴史上民族ブルジョアジーが革命を行なった唯一の例として高く評価している(p. 128)。また別の箇所ではラテン・アメリカではメキシコとキューバを除いてフランスが1793年に行なった革命をまだ経験していないという記述がある(p. 40)。しかしメキシコ革命をフランス革命と同じ意味で反封建ブルジョア民主主義革命と呼ぶことができるであろうか。さらにラテン・アメリカに封建制それ自体が存在したか否かについても議論の余地が多い。

つぎに第2次大戦を契機に産業革命、工業化の段階にはいった諸国としてブラジル、メキシコ、チリ、アルゼンチン、コロンビア、ペルー、ベネズエラをあげ、これらの諸国で産業革命の結果できた新しい経済機構と階級とが、古い封建秩序との間に矛盾をもたらすといっており(p. 101)、産業革命が社会変動の誘因であることが指摘されているが、それと著者のいう労働者、農民を主体とする反封建革命との関係はどういうことになるのか。著者はまず第1に、反封建革命と農地改革が行なわれなければならない、農地改革なしに経済の発展はありえない(p. 91)と強調しているのであるが、両者の関連が整理されて述べられていない。

第3に、ラテン・アメリカで最初に軍人独裁と訣別し民主主義の道を歩んだ国としてウルグアイが、後に軍隊を廃止した国コスタリカとともに封建遺制と訣別した例としてあげられ、ラテン・アメリカで重大な社会改革を行なった国としてメキシコ、キューバと並べられている(p. 107)。しかしこれら両国はもともと封建遺制の少なかったところであり、これらをメキシコ、キューバ革命と同じ次元で扱うのはどうであろうか。

最後にキューバ革命の評価に関して、著者はキューバ革命を封建制度のみならず帝国主義のきずなを完全に断ち切った例として絶賛している。そしてメキシコのブルジョア民主主義革命は50年前の世界情勢のもとでそれなりの歴史的意味をもったが、ブラジル、アルゼンチン、

チリ、ベネズエラ等で近い将来起こるべき革命は今日の状況に適応した新しい型の革命でなければならないとしている(p. 104)。新しい型の革命とはどういうものであるかは明言していないが、おそらくキューバ型の革命を想定しているであろうことは想像に難くない。それならば著者のメキシコ革命に対する今日の評価はどうなのであろうか。メキシコ革命はすでに終わったものではなく今日も生き続けているものであるが、「メキシコ革命が40年を境に国際情勢および国内の諸要因によって停滞を余儀なくされたことはきわめて遺憾である。この革命が以前と同じ歩調で前進しなくなったことは残念である」(p. 103)という言葉があるが、それならば「ブルジョア革命」として出発したメキシコ革命が順調に前進してきたならば「今日の情勢に適応した新しい型の革命」を経て社会主義へ移行すると著者は考えるのであろうか。もしそうだとすれば、メキシコ革命の今日の停滞を打破するためにはもう一度キューバ型の革命を必要とするとの意味か、これは明らかでない。ラテン・アメリカの将来を予想するためにはラテン・アメリカで最初の反封建革命を行なったメキシコの進路を見守ることが重要であると思うが、著者のメキシコ革命に対する現在の時点での評価と、メキシコにおいてのみブルジョアジーの果たす積極的な役割を肯定している理由とが疑問として残るのである。

(海外派遣員 石井 章)

—— 在メキシコ ——